

経済発展するカンボジアの稲から米の流通・販売の鎖

農林水産省元農業研究センター次長

農学博士 齋 尾 恭 子

経歴 農林水産省元農研センター次長、元食品総合研究所理化学、素材利用部長、農林水産省技術会議事務局研究開発官、東京都食品技術センター所長、国際熱帯農業研究所(IITA)理事(主にナイジェリア)、JICAシニア海外ボランティア(カンボジア)、現在愛国学園短大非常勤講師。

1. はじめに

成田空港に近づいた飛行機は、しばしば筑波近郊で高度を下げます。季節により美しい稲田が心を和ませ、つくづくここは豊葦原瑞穂の国と思います。その筑波に、現役時代の後半は農林水産省研究機関に主に勤務しました。その後退職し、2001~2004年の2年半、私はカンボジア王立農業大学(RUA)にJICAシニア海外ボランティアとして赴任しました。

大学での仕事は、13学部からの選抜教官に日本での研究開発手法などを教えるのが主業務でした。業務のかたわら、市場などで米の売られている様子を見て回りますと、同じロットに様々な品種が混じって売られていて、その品質規格や貯蔵状態は最悪でした。

プノンペン、バタンバン、タケオなどの各都市を見て歩き、カンボジアには米の品質基準や検査の必要性を強く感じました。そこで、日本の草の根基金として、大学に精米加工・品質分析試験室(サタケの試験機導入)を整備しました。

現地の生活に馴染むにつれ、徐々に「カンボジアの根幹には、メコン・トンレサップ水系の激しい季節変動が、農業や水産業で生計を立てている人々の暮らしと強い関連性がある」ということに気がつきました。

2. メコン・トンレサップ水系の季節変動

中国南部山岳部に源を発する大河メコンは、ラオスからカンボジアに入り、首都プノンペンにおいてトンレサップ河と合流して、再びメコン河とバザック河に分かれます。トンレサップ河の上流

にトンレサップ湖があり、雨期が来るとメコン河は流域の水を集め、増水しながら面的に氾濫します。溢れた水はプノンベン地点で湖の方向に逆流します。雨期のトンレサップ湖とメコン水系の面積は、乾期の10倍にも拡大し、湖の周辺および水系下流部を氾濫源とします(図参照)。

この雨期と乾期の水系変化は、カンボジアの農業、水産業はむろんのこと、生活、文化、人々の気質全般に大きな影響を及ぼしているように思います。なかでも基本的食である稲(米)は、総人口の75~80%を占める農民の大半が関わっています。また、稲作は季節とその変動性の中で、深水稲から陸稲に至る幅広い品種を利用した実に複雑な組み合わせからなっています。さらに、栄養的にも全エネルギー摂取量の65~75%を占めています。冠婚葬祭の場では、参加者全員にお粥を出す、炊飯を僧侶に配るなどの習慣もあり、米はカンボジア人の誕生から死ぬまでに関わりの深い文化の一部を成しています。

3. カンボジアの経済発達と米のrice value chain

RUAには、派遣後もほぼ2年おきに完全なボランティアで出向いており、集中講義などを行っています。本年1月に5度目の訪問を果たしました。最近では、カンボジアにおける、巨大ビルの建設ラッシュなど、都市部の著しい発展に驚いています。

カンボジアの総米生産量は私の滞在時頃には400万トン(籾)に達し自給可能となりましたが、2012年の統計では880万トンを越え、一転して過

剩生産となっています。また、2010～2012年のGDPの伸びは6%前後、総貿易額は急増し、2000年に33.3億USDであったものが2012年には120.6億に増加しています。その輸入物の約70%が衣料品です。しかし、米の輸出は、この数年倍増しているものの、総輸出額の1.6%に過ぎません。この点につき若干の論議をします。

雨期の水変動に合わせた小規模な稲作農家（全体の95%）は、稲粃を周辺の売人あるいは小さい地域精米所に、取引価格が安い収穫直後に販売します。一方、中・大規模な農家は、大きい精米所に高値で販売しており、ここに格差が生まれています。

大規模な輸出米の生産に限定しますと、2つのタイプを考えることが出来ます。ひとつは、フランス統治時代に大規模灌漑稲作を手がけ、鉄道あるいはメコン河船便でプノンペンに集積、ヨーロッパなどに広く輸出した歴史を持つバタンバンに代表される北西部稲作地帯で行われている方法と、もう一つは、小農が多く、季節変動に依存する南部稲作地帯で行われている方法です。

北西部稲作地帯では、現在輸出を専門とする精米企業がいくつか稼動しています。中でも有名なのが、バタンバンに基盤をおくLORAN import-Export Co. Ltd.です。ここでは近郊の自社の圃場あるいは特別契約の農家圃場から粃を集め、3種類の国際基準を持つ香り米を販売・輸出しています。

一方、南部稲作地帯では、プノンペンのやや北部カンダール州にあるAngkor Kasekam Roongroeng Co. が代表されます。この企業はカンダール、コンボンスプー、コンポット、タケオの南部4州の農家あるいは農業組合と契約を結び、企業側から種粃を配布し、収穫物の半分を妥当な価格で買い上げ、また農家側に技術提携、経営指導などの便宜を図っています。このメンバーシップシステムを通じ、農家は栽培が安定化し、多角化（牧畜、野菜・

果樹栽培、水田魚養殖など）を進め、収入を向上すると同時に、企業側は同一品種を集め、大規模に高品質精米（ネアン・マリという香り米などを国際基準で販売）を加工できるwin-winの関係が成立し、今やメンバーは5万を越えています。

4. 発展の中での願い

カンボジアでは経済発展しているとはいえ、稲作農業に関しては、①収穫後の調製ロスが著しく高い、②一般農家は貯蔵庫がなく、稲から米への流通・販売の鎖に入れにくい、③タイやベトナム国境での非合法輸出の定常化、④市場流通米の品質基準・規格の不備、⑤米の高付加価値化商品の開発不足等々の問題が累積しています。

急速に動いているカンボジアにおいて、大半を占める貧しい農家が除外されない方式で、稲から米への流通・販売に参加できる施策の整備が進むことを願っています。そして、稲と米を文化とする日本人であるから一層、季節変動と稲や魚の関係という脆い環境生態系維持の仕組みがその中で壊されないことを強く願望します。



図 トンレサップ湖の周辺および水系の下流部分の薄青色に見える部分が雨期の氾濫原